

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-169	13-034	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
<b>題名（原題／訳）</b>		
Discordant and concordant alcohol use in spouses as predictors of marital dissolution in the general population: results from the Hunt study. 一般人の離婚予測因子としての配偶者との調和のとれない飲酒および調和のとれた飲酒：Hunt 研究の結果		
<b>執筆者</b>		
Torvik FA, Røysamb E, Gustavson K, Idstad M, Tambs K.		
<b>掲載誌</b>		
Alcohol Clin Exp Res. 2013 May;37(5):877-84. doi: 10.1111/acer.12029. Epub 2013 Feb 5.		
<b>キーワード</b>		<b>PMID</b>
アルコール、調和、不調和、離婚、婚姻解消		23384147
<b>要 旨</b>		
<p><b>背景：</b>                      これまでの研究で、多量飲酒は離婚の予測因子であることが示されてきた。しかし、夫婦両者から得た前向きデータによる研究はない。それゆえ、夫妻間および夫婦における調和のとれた飲酒（＝同じ飲酒傾向）と調和のとれない（不調和な）飲酒（＝異なる飲酒傾向）の間の飲酒の影響は知られていない。同様の飲酒傾向の場合は両親ともに多量飲酒の場合は悪影響がより強く出ることから離婚率の増加につながる可能性がある一方で、同様の飲酒傾向であることから婚姻の安定性にもつながりうる。</p> <p><b>方法：</b>                      ノルウェーのすべての住人を対象とした健康調査で、夫婦両方が参加している 19,977 組の夫婦を対象とした。飲酒と精神的苦悩に関する情報が収集された。その後 15 年間の離婚のリスクに関して生存解析で検討した。人口統計学的要因及び精神的な苦悩が共変数として用いられた。</p> <p><b>結果：</b>                      多量飲酒は適量飲酒をリファレンスとすると、人口統計学的指標を調整後も男性ともに離婚のリスクを増加させた（ハザード比(以下 HR) 1.39、HR 1.41)。離婚のハザード比は、夫のみが大量飲酒者の場合で 1.51 であった一方で、妻のみが大量飲酒者の場合 3.07 であった。さらに、禁酒者同士である場合（HR 0.40）、大量飲酒者同士である場合（HR 0.35）で、離婚のリスクが低かった。それでも離婚リスクは大量飲酒者同士の夫婦（HR 1.63）の方が少量飲酒者同士の夫婦より高かった。</p> <p><b>結論：</b>                      この研究から、アルコールの飲酒量および飲酒傾向の一致性のいずれもが離婚の重要な予測因子であるということが明らかになった。</p>		